

「練習航海の思い出 俺は日本人だ！」（協同組合通信 14.10.23）

海の感動を読者諸氏と子供達に、今こそ伝えたい。

1973年北大の実習船おしよる丸の南方航海で、生涯の記憶に残る体験をした。

台湾の西からバッシー・パリンタン海峡というシナ海の荒れる海峡をようやく抜け、舷側でほっとしていた。何やらブリッジが騒がしい。何十日振りに、レーダサイトに映った日本の島影を見つけ、学生が興奮しているのだ。海図とコンパスで確認し、しっかりとその島影を目視できた時の感動である。

時あたかも、水平線が薄紅色に染まり始めた。

海の1日の中でも最も深閑とした敬虔な時、荘厳な朝まだきである。

日本の領海に入った安心感。嬉しかった。

領海の外での操業や楽しかったシンガポールでも、どこか張り詰めていたのだ。それが、解放された瞬間である。

「俺は日本人なんだ!」という気持ち、一瞬の内に胸に込み上げて来た。

純粹に、この国に生まれてきたことの喜び。

誰の為ではなく、「この国を守りたい」と思った。

この体験を、是非とも訴えたい。

現在は、ジェット機で短時間に、海外旅行を楽しむことができる。

大変、便利な文明の恩恵を受けた、言わば、デジタルの旅である。機会があれば、アナログの船旅を是非とも体験して欲しい。

当時の練習船は、フルスピードで時速約22キロ程度であるから、一流のマラソンランナーが駆け抜ける1時間の距離より短い。

海から陸へのアプローチはゆったりとしており、その分様々な思いが凝縮した最高の気分をたっぷり味わえる。

デジタルな時代であるからこそ、アナログの船旅は心に染み込むのだと思う。

自分が愛しくなる。

人が、本当に恋しくなる。

そして、素直になる。

こんな内なる気持ちを、言葉ではなく、自分で体験して欲しいと切に思う。

確かに、海は判断を間違えれば怖いところであるが、人間はなかなかそう簡単には参らない。

昨夏、長崎の五島から1ヶ月も一人で漂流した漁師が言っていた。「人間死なないもんだなー」って。いい言葉だと感心した。

（ 気象情報システム株式会社 高 津 敏 ）